

協会の使命としての人材育成、 伝統と情熱、そしてシステムの上に立って

うらわまこと

バレエの歴史には、いろいろな考え方があります。たとえばポアントを使うなど今の形に近いロマンティック・バレエの時代になってからですと約200年になります。それに対して、わが国の歴史をみると、ヨーロッパのオペラハウスに近い帝国劇場が建設され、そこに海外よりバレエの専任教師を招いてから110年余り、また多くのバレエダンサーを育て、公演を行ったエリアナ・パウロバ女史（以下敬称を略します）が来日してからはおおよそ100年です。しかし、そのころはまだ海外のバレエに関する情報は少なく、戦争も始まったため、内容もレベルもまだ本格的なものとは言えませんでした。

したがって、わが国における本格的なバレエのスタートは、第二次世界大戦後、具体的には終戦の翌年、1946年に上演された『白鳥の湖』全幕といえるでしょう。これは、戦時中でもバレエへの情熱を失わず、エリアナ・パヴロバや、その後ロシアから来日したオリガ・サファイアらに学び、バレエ団を作って活動していた服部智恵子/島田廣、東勇作、貝谷八百子らが合同し、そこに上海で踊っていた小牧正英が加わって結成された東京バレエ団（現在のものとは別）によるものです。そして敗戦の混乱のなか、爆撃で焼け野原になった東京での公演は奇跡ともいわれ、戦争に打ちのめされた人々に勇気と感動を与えて大変な評判になり、追加公演を行ったほどでした。

なぜこのようなことを書いたかという、その約10年後に設立され、今日までわが国・バレエ界をリードしてきた日本バレエ協会の中心になってきたのが、この東京バレエ団にかかわった人たちだったからです。東京バレエ団は4年を経ずに分裂、先にあげた人々は自分のバレエ団によって独自の活動を始めます。さらに、初演時は出演者の1人だった松尾明美、松山樹子、後に参加した谷桃子もそれぞれ自分のバレエ団をつくり、その後しばらくは、これらとは少し別の道を歩いていた橘秋子・牧阿佐美バレエ団、大阪の法村友井バレエ団とともに、バレエ界の主体となっていました。

1957年8月、ソ連（現在のロシア）から、ボリショイ・バレエが来日、当時のバレエ人たちは、まさに本物中の本物を目の当たりにして強い衝撃を受けました。

そして、かつて袂をわかった舞踊家たちが、初日の公演を見てすぐ、日本のバレエをさらに発展させるために力を合わせようという意思をかためます。早速その月中に発揮人を決め、翌58年3月には日本バレエ協会としてスタートしたのです。服部智恵子が、最初は任意団体だったので運営委員長として、そして72年社団法人化によって初代会長となりました。ここで島田、東、小牧らも主要な役をつとめ、第2代に島田廣、次いで谷桃子、さらに東勇作に師事した薄井憲二、そして小牧バレエ団のプリンシパルだった岡本佳津子が会長をつとめます。そして昨2024年、会長に篠原聖一、副会長に今村博明が就任しました。その間支部は全国に広がり、2011年には公益社団法人の認可を受けています。

この約70年の間、多くの公演、バレエコンクール、講習会、ワークショップ、顕彰、海外との交流などの事業を行い、さらに文化庁など公的団体の事業への参加、受託など、わが国バレエ界をリード、その発展に大きく貢献してきました。

ここで、日本バレエ協会の特性と、これに関連した重要性について考えてみます。これについては、同じバレエの統括団体である日本バレエ団連盟と比較すると分かりやすいでしょう。この2つの団体の基本的な違いは、日本バレエ協会（以下協会）は個人参加、日本バレエ団連盟（以下連盟）はバレエ団単位の参加だということ。ここから次のような特性が生まれます。まず協会は、参加条件はあるにしても、全国のどこからでも、だれでも参加できる開かれた団体であり、それに対して連盟は厳しい資格を必要とするエリート組織だということです。そこから当然にそれぞれの役割も決まってきます。

わが国の特性として、全国各地に広がる個人経営のバレエ研究所、バレエスタジオなどが、多くの優れた舞踊家を生み出して、バレエ界を支えてきました。そういったバレエ教室の指導者、ダンサー、そしてフリーランスで活動するダンサーを統括するのが協会。これらの会員のための事業で大切なのは、基本教育であり、オン・ザ・ジョブ・トレーニング（仕事をとうしての訓練）としての、実践する場、踊る場の設定です。これは、少子化、経済不況など厳しい状況に直面している、とくに地方のバレエ人たちにとって大変に意義のあることで、それが最もしっかりと行えるのが全国組織である日本バレエ協会です。逆にいえば、協会が弱まれば、全国のバレエ界はさらに厳しい立場におかれるでしょう。

日本バレエ協会の主要な事業、すなわち、バレエコンクールはもちろん、全国の支部が集結する全国合同公演、そして新進舞踊家たちが創作し、またそのプロセスに参加するバレエ・クレアション、これらはまさにこういった考えに沿ったものです。

ダンス・クラシックのトレーニングは、バレエだけでなく、すべての演技人の、さらにアーティスティックなスポーツの基礎としても必須の要素です。しかも、これらは長期的、システム的に行うこと、すなわち講習会やワークショップも含めて、計画、実施だけでなく、その評価とフォローがなければ効果は上がりません。長い歴史をもち、優れた志ある先人舞踊家、レジェンドたちによって運営されてきた日本バレエ協会こそ、広い分野に通用する人材の育成に最もふさわしいのです。

会長篠原聖一、副会長今村博明両氏を中心とした新体制が、協会の使命、ミッションの重要な1つとして、明確な意図と認識をもって、この課題に取り組むことを期待します。これらの活動には、情熱も大切ですが、やはり資金も必要です。公的にも社会全体としても、こういった点を理解し、長期的、総合的な視野にたって助成、支援することが税金の有効活用、最近のことばで言えばコスパという視点からみても、きわめて重要であると考えます。